



## 伊丹の昔話と民話と伝説


池田利男



第一話	大木	口酒井の大木、聖徳太子の馬つなぎの松、法巖寺の大楠、南野山了福寺の大楠、頼山陽の遺愛の台柿、昆陽寺のトゲなし柊
第二話	塚	大鹿のお塚、魚塚、御願塚、黄金塚、大覚さんの竹塚、高 師直の塚、鶴塚
第三話	墓	和泉式部の墓、自然居士の墓、一の辺の墓
第四話	石	行基石、雲竜石、古城の鯉石、夜泣き石、礼拝石、辻の碑
第五話	井戸	金岡の清水、弘法大師と岩屋の井戸、行基井戸、為朝八幡産湯の井戸
第六話	川	白水川、谷川のゆすり橋、猪名川の芹、駄六川
第七話	笹	猪名の笹原、猪名の小笹
第八話	酒	清酒発祥の地
第九話	行基	行基とむぎわら音頭、行基の足跡田、行基の掘った池と溝、行基と満仲さんの争い
第十話	その他	首穴、伊丹の相撲取り、菅公とあられ茶、首切り地蔵、有岡、伊丹に二度の遷都案

1. 大木にまつわる昔話・民話・伝説		
口酒井の大木	昔、口酒井に大木があった。夕方になると西日が差して、木の影が吹田の方までいった。その木を伐採して京の西本願寺の棟上げに使った。猪名川を川で下り、尼崎から淀川を京まで流したという話でした。	
聖徳太子の馬つなぎの松	<p>荒牧の天神川の土手に聖徳太子の「腰掛石」（現在は寺内）があった。</p> <p>その時に馬を繫いだ「馬繫ぎの松」が門前にあります。太子が四天王寺から中山寺に往還された時、靈感を受け「吾この地に容を住め置きたし」と御堂を建立され容住寺と号された。</p> <p>門前の大公孫樹は伊丹市の保存木の第1号です。</p>	 <p style="text-align: center;">容住寺</p>
法巖寺の大楠	<p>昭和39年の鑑定では、根回り11m、幹回り6.2m、樹高28m。県、市の天然記念物である大楠。</p> <p>嘉永元年（1848）本堂修理に際し、その費用捻出のために売却の話が決まり、木挽きが来て切り倒さんとした時に、俄かに悪寒を感じ樹がすすり泣くように感じ、ついに中止してしまった。</p>	
南野山了福寺の大楠	<p>行基菩薩が昆陽寺を建立の時、南野に大楠があった。一夕夢の中で、此の樹の梢に靈光が漂っているのを見られたので、見に行かされると高さ20丈程の大楠であった。此の樹を切って薬師如来像を2体彫刻され、一体は昆陽寺に安置し、一体は了福寺に置かれたので、この寺の山号を南野山と号した。</p>	




<p>頼山陽の遺愛の台柿</p>	<p>岡田家酒蔵の横、柿衛文庫の庭に、頼山陽の遺愛の柿の二代目、三代目の柿がある。文政十二年（1829）頼山陽が49才の時、広島から母を迎えて箕面にもみじ狩りを催した時、剣菱の醸造元坂上桐隠宅で盛大な酒宴を開いた。その席に出された大きな柿の甘さに舌鼓を打って「もう一つ」と所望したが、無いとの事で、残念がった。</p>	
<p>昆陽寺のトゲなし柃</p>	<p>行基さんが昆陽寺の池の水に、自身を映して絵を描き柃の木で自分の像を彫られた時、木の屑を捨てられたのが、育ったものである。 「古記曰く、大柃樹あり、時に紫雲棚引いて威光発す。此の樹を取り一刀三礼して、自身の影を造り、その余材を捨て給へば、枝葉を生じて繁栄陰森たり、今に蓮池の傍にあり」（放生池）</p>	


2. 塚にまつわる昔話・民話・伝説	
大鹿のお塚	<p>お塚は経塚である。観応二年（1351）妙宣寺が法華宗に改宗した時、前の真言宗の仏像、経巻釈書ことごとく、この地に埋め、丘のうえに松を植えた。その時黄金の鶏を埋め、村が貧しくなれば、これを掘って救えと伝えられている。</p> 
魚塚	<p>干害の時に死んだ昆陽池の魚を埋めた、魚塚は二か所あった。池の東南の池中に丸く突き出た塚であった。池の北にあった三つの島の中にあった。</p>
御願塚	<p>帆立貝式古墳。東の掛塚。北の満塚。東南の温塚。西北の破塚の四つの陪塚と会合せ「五箇塚」から呼ばれた。御祭神は孝徳天皇と言われているが、宣化天皇の第二皇子の焔の皇子とも言はれている。</p> 
黄金塚	<p>東洋リノリュウムの会社、敷地内の黄金塚には黄金伝説がある。「訪ね見よ三葉五加木（うつぎ）、その下に黄金の瓦千枚ぞあり」</p>
大覚さんの竹塚	<p>大鹿の大覚山妙宣寺の石橋家の横に一叢の、紫竹が茂っている。大覚さんが馬にてこの地に来られた時に、手に持っていた竹の杖を門前の地に押し立てて、言われた「吾、教えが末世まで盛んであれば、この枝は活性して枝葉を生じ繁茂するだろう」と言われたので、この竹は他処へ移しても、根が付かない。</p> 


高 師直の塚	イズミヤの前に、高師直・師泰兄弟が討たれたとされる地に、大正四年建立の碑がある。この塚を移動させようとした人が、腹痛を起こすなど祟られたとの話がある。	
鶴塚	伊丹城主、伊丹兵庫頭新興の時代、家臣の北川原長勝は荒木村重の縁者の為、疑われて、猪名寺に一城を設けて戦うが討ち死にした。村重は天正二年に伊丹親興を敗走させ、伊丹城主となる。村重は長勝を弔うために、長勝の鎧を埋めたので、「緋緘塚」と言ったが、鶴が多く飛んでいたので「鶴塚」と言われる様になった。	

3—1・墓にまつわる昔話・民話・伝説		
和泉式部の墓	元夫が、和泉守道貞であったので和泉式部と言われた。式部は、御所に仕える女官の呼び名である。藤原（平井）安昌と再婚したので、平井の領地の近くの伊丹坂に墓・供養塔がある。 一節に、この塚を讃岐塚と言う。	
自然居士の墓	荒木村重の14才の息子が、有岡城落城の時に、信長に殺されたのを憐れんで、村人が建立した。或る時、村人が、この墓が農地なので邪魔になり、移動したところ毎晩、元に帰りたいと泣いたので、元へ戻した。	
一の辺の墓	南野の一の辺の墓は、仏の地を象っている。この墓は行基さんが、昆陽池を掘った時の鍬に付いた土で出来た物	


3-2・石にまつわる昔話・民話・伝説

<p>行基石</p>	<p>鈴原町に有り。二月堂建立の時に行基が、祈念したら石が飛んで行った。大仏さんの工事の時に六甲山の石を箸で、東大寺に送っていたが、不要になったので落ちた石。</p>	
<p>雲竜石</p>	<p>猪名野神社に「雲竜石」と刻まれた石がある。近世末期に横綱、雲竜久吉が担いだ石だと言われている。</p>	
<p>古城の鯉石</p>	<p>文化年中に有岡城跡の畑の中にあつた大石を、掘り起こすと石の下に鯉がいたので猪名野神社の弁天池に放した。大石には鯉の型が付いていたが、お役所の庭に引き取られた。 鯉石は現在、伊丹市立博物館の前庭に保存してある。</p>	
<p>夜泣き石</p>	<p>野間と富松の境のサイメにあつた石。南野へ持って行かれたが、夜になると石が「サイメに去のう」と言うので元へ戻した。</p>	
<p>礼拝石</p>	<p>大鹿にある。広さ一尺・厚さ三寸の石。行基さんがこの石の上にて、天神地祇を礼拝しておられた。</p>	
<p>辻の碑</p>	<p>往古、源満仲公が建てられたと伝わっている。高さ三尺・横二尺五寸の自然石。摂津の国の中央であることを標示する為に建てられた。「従東寺十里」 東・高槻・関戸より七里。 西・須磨より七里。 北・丹波・天王峠より七里。 南・堺大小路より七里。</p>	


4-1・井戸にまつわる昔話・民話・伝説		
金岡の清水	平安時代、猪名野に遷都の話があり、菅公と親交のあった「画聖巨勢金岡」に伊丹の地形を図に書いて、宮中に出せと仰せられた時、清水が湧き出ていたので、その水で図を描き献上された。清水町の「島宅」に泉があったが売却されて、無くなった。地名の清水町はこの清水から、流れた川の名が金岡川となった。	
弘法大師と岩屋の井戸	岩屋の村には昔から井戸が無かった。旅の僧が来られて、水を飲ませてくれと言われたが「お前のような乞食に飲ます水があるかい」と言ってみせなかったら「人にも飲めん水なら飲めん様になるだろう」と言はれ、それからは水が出ないようになった。村中で井戸を掘っても金気が強くて、飲める水が出なかった。此の乞食坊主は、どうやら弘法大師だったようである。	
行基井戸	行基さんが掘った井戸。疱瘡に良く効く水であった。昆陽寺の塔頭の正覚院の南にあり、天平九年の疱瘡が流行った時、聖武天皇が行基菩薩に請はれて井戸を掘り、神通力にてインドから無熱地水を引き取り、加持して庶民に与えたところ、よく効いた。	
為朝八幡産湯の井戸	高畑村・八幡神宮の社の下は古井戸にて鎮西八郎為朝の産湯を汲みし処と言う。現在は東洋リノリュウムの工場となっている。 為朝公の母君を「小笹の局」と言う。	
4-2・川にまつわる昔話・民話・伝説		
白水川	西桑津の東に岩屋橋があった。北の石橋に待兼山と言う山があって、北から流れて来る川が、一名白水川と言った。この川でお姫さんが米を洗っていた処、恋敵の男に殺されてしまった。それでお姫様の恨みで、今でも其の川の水が、米のとぎ汁のように濁っている。	
谷川のゆすり橋	北村の裏に谷川があった。そこのゆすり橋は、鋳物師と辻村との間の何処かにあった。子供らが乗ったら、ゆさゆさ揺れる橋だった。大雨の時にゆすり橋が無くなったので、村人たちは「あれは橋では無く、龍だったので、天上してしまった。	
猪名川の芹	住吉大神が官居を建てる為の材木を、猪名川の上流から流すのを見た、猪名川と武庫川の女神達が、妻に成りたいと思った。猪名川の女神は武庫川の女神に嫉妬して、大石で打ち芹を抜いた。それで武庫川には、芹が無く、石ばかりである。	

<p>駄六川</p>	<p>高瀬川と言われた谷川は、村重の時代には一時期「信濃殿川・しなんどがわ」とも言われた。駄六川は、高瀬舟に一駄「樽2個」の六駄分を乗せらる舟であったので、六駄・駄六と言われる様になった。</p>	
------------	--	--

5-1・笹にまつわる昔話・民話・伝説

<p>猪名の笹原</p>	<p>東洋リノリユームの工場の中に、笹竹の一隅が古くからある。黄金塚や、鎮西八郎為朝の産湯の井戸がある。撰津名所図会によると、伊丹の南、有馬街道の東に、方三間程の笹原あり、往来の人、この笹を折り取る事あれば、気が触れると言われた。</p>	
<p>猪名の小笹</p>	<p>昆陽寺の東に、猪名の小笹と称されている一隅の笹竹があった。二坪足らずの笹原で、昭和の初め頃に、小笹の場所がワカモト製薬の工場の敷地内となり、又、昆陽寺の奥、88か所石像の隣に移植された。この小笹を、毎年正月元旦に、開山行基像開扉の用具とす。この笹は、昔、佐藤継信の笹竹をここに立て置きしが、枝葉繁茂するところとなり、笹氏の苗孫今に昆陽村に有り。</p>	

5-2・酒にまつわる昔話・民話・伝説

<p>伊丹は清酒発祥の地</p>	<p>清酒は鴻池で始まった。山中鹿之助の子の新六幸元が大祖父の山中信直を頼って鴻池に来た。新六幸元は文武に優れ、亀岡の城普請の時に、鴻池の城大工が幸元の智恵を借りて、堅固な城を築いた。それを知った城主が、幸元に大判一枚を与えた。これが山中家が酒造業を始める元手となった。幸元の八男善右衛門は大阪に出て、鴻池財閥となり、本家の七男、新右衛門は酒造業を辞め、郷士として槍持・挟み箱持ち、馬の鼻取り、が付いていたが、子孫は無かった。又、長男は小浜にて医者となり後世まで続いた。</p>	
------------------	---	--



6・行基にまつわる昔話・民話・伝説	
行基とむぎわら音頭	<p>摂州功德盆踊りを、むぎわら音頭と言う。            行基さんが昆陽池を掘った時、工事に従事する農民の、娯楽のために考案した。            兵庫県の、重要無形民俗文化財に指定されている。</p> 
行基の足跡田	<p>行基さんが昆陽池を掘った土を、鍬で抛った時の足跡が付いた田。片足は西宮に有ったとの話。甲山はその時に、行基さんが抛った土で出来た山である。</p>
行基の掘った池(5)と溝(2)	<p>昆陽上池（昆陽池）*昆陽下池（池尻に有ったが慶長10年（1608）に、埋め立てられた）*長江池（瑞ヶ池の交通公園）*中布施池（瑞ヶ池）*院前池（主膳池か・片桐主膳貞隆の領地・慶長9年巳年築率。）            *昆陽上池溝（天神川） *昆陽下池溝（天王寺川）</p> 
行基と満仲さんの争い	<p>昆陽の行基さんと多田の満仲さんが争った。或る時、多田の方面で川が白く濁っているのを見て、旅人に聞くと水が無いので、白米を流して、水が有るように見せていた。此れを聞いて、行基さん方が多田を攻めると、勝ったので多田神社には仁王像が無い。</p>

7・その他	
首穴	<p>池尻は村を流れる昆陽井から、取水する権利を持たなかった。有る年旱魃で、稲が枯れ死に寸前になり、或人が犠牲になる覚悟で、首が入る程の穴を掘り、井から水を取り入れた。この人は処刑されたが墓碑が、昭和45年に建立された。「池光院清風永照居士菩提」これにより村は大いに助かった。</p>
伊丹の相撲取	<p>鴻池・・・「獅子渡 藤次郎」 山口・・・「甲山弥五郎」            柄谷・・・「浅尾山・ささ波・玉垣となり大関となる。            西野・・・「朝山長左衛門」祭りの地車を一人で止めた。</p>

<p>菅公とあられ茶</p>	<p>菅原道真公が、筑紫に配流の途中に臂丘に、立ち寄られた時、鋳物師の橘と大路姓の村人が、「あられ茶」を差し上げたと言う。その時菅公は臂を枕に休まれたので、この岡を臂岡と言う。橘諸兄の三男が、この地に居住したので、その子孫が、橘・大路姓と言われた。</p>	 <p>臂岡天満宮</p>
<p>首切り地蔵</p>	<p>昆陽の西国街道から北寄りに、小道があり、抜け道になっていた。或る時、この道を通った大名行列の前を、子供が横切った為に、切り殺された。その子の霊を弔う為に、地蔵が建立された。</p>	
<p>有岡</p>	<p>有岡とは有明の岡と言うこと。孝徳天皇の時代に猪名寺村の法演寺の開祖法道仙人、本尊薬師如来の霊像、光明を放ち、この岡を照らし給う故に、時の人、有明の岡と称す。</p>	
<p>伊丹に二度の遷都案</p>	<p>一回目は宇多天皇の仁和三年（887）に伊丹への遷都が朝廷の許義にかけられた。此の時、画家の巨勢金岡が聖宝僧正の依頼を受け、伊丹に来て街の風景を描いて、内裏に奉祭ったが実現しなかった。二回目は治承四年（1180）6月平清盛は、僅か170日間の短い期間、神戸の福原へ遷都を断行したが、福原が狭かったので、公家の間から「伊丹の昆陽野」にしてはどうかと言う強力な意見が出て、清盛も一旦は昆陽野に決めたと言われたが、突然に源氏の頼朝が伊豆で「旗揚げ」をしたので、実現しなかった。</p>	 <p>宇多天皇</p>  <p>平清盛</p>

### 【参考書類】

- ・伊丹の伝説、付、有岡古続語・・・梶 曲阜
- ・新伊丹市誌      ・伊丹を歩こう      ・伊丹の暮らし      ・伊丹の年中行事
- ・伊丹郷町物語      ・地域研究いたみ 第33号      ・その他